

1 日目、午前は成田龍一氏（日本女子大学）、和田悠氏（立教大学）による講座が、午後は矢野暁氏（明治大学大学院）、生田幸士氏（東京都立八王子東高校）による「歴史総合」の授業実践報告がそれぞれ行われた。講座、報告とも、「歴史総合」における「問い」と「資料」の活用についての熱心な取り組みであり、私たち歴史教育に携わる者にとって大変有意義なものとなった。

成田龍一氏「福沢諭吉の三つの顔」では、福沢諭吉の思想の“連続性”と“断絶性”が問われた。福沢の国家観・文明観について、諸資料を活用しながら生徒に探究させた。福沢は、国民国家形成の条件としての個人の独立、国際社会への参加の必要性を説く一方、その気概のない中国・朝鮮を「悪友」として位置付け、日清戦争の勝利を喜んだ。成田氏は、生徒に福沢の思想の“連続性”と“断絶性”を考察させつつ、その根底を一貫する「国民国家建設に向けた危機感」を浮かび上がらせた。

和田悠氏「子育てと仕事の両立をめぐる現代史—小児科医・松田道雄を軸に一—」では、結核療養から子育て、マルクス主義者と幅広く活動した松田道雄の、1960年代の高度成長期における子育て・保育へのアプローチの在り方が問われた。「子どもをいかに育てるか」といった、現代にも通じる課題を生徒に探究させた。その中で、松田の「社会の中で子どもを育てる」という思想の「先見性」と、メディアを通してそれらを普及させた「時代の寵児性」を強調しつつ、現代社会における「子育ての危機」、「幼児教育の場」としての保育園の在り方について問題を提起した。

矢野暁氏「朝鮮戦争におけるアジアと日本」では、朝鮮戦争がどのような戦争として受け止められたのかを「問い」として、世界、東アジア、日本のそれぞれの視点に立った資料を提示し、それらから得られる多様な解釈を通してこの戦争を見つめ直す。現代の私たちのこの戦争のとらえ方、東アジアにおける日本の位置付けについて考察することにもつながることを示した。

生田幸士氏「『歴史総合』の授業づくりでおさえおきたい点」では、「歴史総合」実施に向けた、教員間での意識・課題の共有化の必要を訴え、従来の歴史学習の実践を検証して成果を抽出し、「歴史総合」へ肯定的に継承していくことを強調した。授業実践では、大項目「近代化と私たち」を意識した「日本史B」を事例に、各単元で設けられた「問い」に対し、生徒が資料を活用して考察し、その結果をまとめるという活動の在り方を示し、「問い」の再生産とそれによる学習の深化というスパイラルを意図した単元構成が重要であるとした。また、「近代化」、「大衆化」、「グローバル化」を常に関連させ、それぞれに焦点を合わせながら学習内容を理解させること、加えて、「歴史総合」に歴史学の成果を反映させることによって、新たな視点・見解が創生される可能性を示した。

研究協議では、「歴史総合」における学びの在り方、情報の扱い等々の観点から議論が行われた。「問い」の設定については、これを目的化することに終始せず、歴史学習における新たな発見につながるための方策として向き合うという方向性を共有することができた。「問い」と「調べる（考える）」という行為に親しむことで、教員、生徒がともに「学びの共同体」を形成しつつ、根拠に基づき、自身の言葉で発信することができる環境の整備の必要性を確認した。情報の扱いについては、情報過多の現代社会においてこそ、これを相対化し、その正しいことを証明する学習（メディアリテラシー）を全教科横断的に取り組むことで、発信者意識を育むべきであることを共有した。また、「歴史総合」が学問の場だけでなく、仕事や生活において解決したい「問い」を見つける（リサーチクエスチョン）手段としての有効性を秘めていること、私たちが「主体性を持つ国民」として権力や社会を見つめ、課題を見出し、解決に向かう姿勢を育み続けることの大切さを認識し合い、1 日目を終えた。

2日目、午前は上田誠二氏（日本女子大学）、大串潤児氏（信州大学）による講座が、午後は成田龍一氏（日本女子大学）、大串潤児氏（信州大学）、酒井晃氏（日本女子大学）、矢野慎一氏（横浜翠嵐高校）による「歴史総合」のシンポジウムがそれぞれ行われた。1日目同様講座、報告とも、私たち歴史教育に携わる者にとって大変有意義なものとなった。

上田誠二氏「近代化と周縁化—洋楽と邦楽の狭間を生きる〈感情〉表象」では、実際の音声や写真、上田氏が実際に演奏することを通じて、近代国家におけるジェンダー役割分割や国家の周縁に置かれた人々について感覚に訴える形で生徒に探究させた。戦前・戦中に男性文化としての吹奏楽が、女性文化としての鼓笛隊が形成されていったことが示された。また、近代国家形成に伴い周縁に置かれ、牛馬と同じ扱いを受けた芸（娼）妓が、音楽を通じ近代国家の国民として、必死に生きようとする姿が、君が代を演奏した音源とともに示された。

大串潤児氏「朝鮮戦争を考える—地域から／戦争経験から」では、個人の経験や地域の事象から世界とのつながりを考えることが問われた。戦後、長野県下伊那郡平岡村に残った朝鮮の人々が朝鮮の言葉や歴史、風習を子供たちに教えるために満島初等学院が作られ、教育基本法・学校教育法などの戦後改革の中で、学院が閉鎖されることとなったことや同時期に本格化した公民館運動の中で、松尾村では、村民参加の全体討論会が開かれ、平和や生活擁護の運動に村長が先頭になり立ち上がろうとしたことが示された。民主化というベクトルをもつ占領・戦後改革の持つ意味について再考した。次に松尾中学校藤木三郎クラスの試みが紹介され、村の新聞に掲載された戦時中朝鮮からの志願兵の教育にあっていた藤木の経験と朝鮮の人々に対する認識不足、朝鮮統治から日中戦争にいたる日本の国是が誤りであった過去が紹介され、1つの個性（出来事）のなかにアジアや世界とのつながりがあることが示された。

成田龍一氏「歴史総合の叙述と実践」では、歴史学と歴史教育の関係が強化され、歴史教育も変化したことが述べられた。その中で、歴史叙述と歴史実践の六層構造について説明があり、教科書作成は、歴史叙述であり、歴史実践を教員が実施することが述べられた。また歴史実践をする中で、複数の「私」や「私たち」が存在し、絶えず「私」や「私たち」が変化することが述べられた。

大串潤児氏「『歴史総合』の教科書をつくる」では、教科書記述では、図版などの資料で、歴史考察の主体性の喚起を促すものが選択したことや、多くの情報に囲まれている子供たちにとって、日常的に情報の取捨選択を行っており、情報の読み取り方や根拠の考察へと誘うことの重要性が語られた。

酒井晃氏「『歴史総合にかかわる』ノート」では、歴史総合の広がりについて述べられた。学術雑誌や刊行物から歴史総合についてどのようなアプローチがなされているのかについて言及があった。

矢野慎一氏「現場から『歴史総合』を考える」では、歴史総合に至る過程や科目としての性質、可能性と課題などについて述べられた。歴史総合は、社会科歴史科目への回帰であることが述べられ、現状では、教師が主体的に主題を選びとることが可能である一方、課題としては、主題にはどのようなものを選択するかが挙げられた。

研究協議では、午前中に行われた講座に関する質問や歴史総合の単元や単位数など様々な議論が行われた。その中で、主題学習である歴史総合は、限られた時間の中で、選択と集中、子供たちの問いを利用すること、何を教えるかといったスタンスはなく、教科書に書かれていないことでも扱うことができ、教員の裁量でやる部分を選択できることなどが確認され、2日目は終わった。